

第39回

日本コミュニケーション障害学会 学術講演会

予稿集

The 39th meeting of Japanese Association of Communication Disorders



生きる、伝えあう

—ことばを紡ぐ、こころを織りなす、いのちをつなぐ—

会 長：進藤 美津子

(上智大学 言語聴覚研究センター)

主 催：日本コミュニケーション障害学会

共 催：上智大学 国際言語情報研究所

上智大学 言語聴覚研究センター

会 期：2013年7月20日(土)・21日(日)

会 場：日本歯科大学生命歯学部

富士見ホール・九段ホール

構音の獲得に潜む音響的側面を探る —日本語ラ行音を中心に—

荒井 隆行

上智大学 理工学部

いろいろな言語において構音の獲得がしやすい音、しにくい音が存在するが、日本語もその例外ではない。特に日本語においてラ行音は、獲得が遅い音であると言われている。そしてこの音は、第2言語習得者にとっても習得が難しいことが指摘されており、また高齢者での異聴も多いのも事実である。

そこでこのラ行音を中心に、構音の獲得に潜む音響的側面を探ってみることにした。まず、ラ行音の異音として実現される可能性のある子音を列挙し、それらの子音に対して成人の発話の音響分析を行った。母音に挟まれたラ行子音は通常、はじき音になると言われている。一方、語頭に現れたラ行子音は(そり舌)破裂音のように調音されることも知られている。一方、英語の /r/ のような接近音や /l/ のような側面接近音として発音されることも少なくない。そこで、異音となり得る音として、次の子音を分析した：有声そり舌破裂音、有声歯茎はじき音、有声そり舌はじき音、有声歯茎接近音、有声歯茎側面接近音、有声そり舌側面接近音、有声歯茎側面はじき音。さらにこれらの音を分析し、その結果に基づいて音声合成後、聴取実験によって「ラ行音らしさ」の程度についても確認した。音響分析と聴取実験の結果、ラ行音では20-30 ms という短い区間途切れ、かつ前後に特定のフォルマント遷移を伴うことが分かった。さらに、それ以外のパターンとして、音の途切れがなくても40 ms 程度の短い区間においてフォルマントが素早く遷移するような場合も、ラ行音になることが確認された。

次に、ラ行音を実現する声道モデルの製作と生成実験を行った。アクリル製の声道にアルミ製の可動式の舌を設置し、舌と連動するレバーを高速に動かすことによって素早い舌の動きを実現した。この模型を用いてラ行音の生成実験を行った結果、ある程度の速い舌の動きが実現されたときにラ行音が実現される条件を複数確認した。一方、速さを含め舌の動かし方によっては必ずしもラ行音にならない場合もあった。

最後に、幼児音声に関するケーススタディーとして、幼児の発話におけるラ行子音の観察を行った。同じ言語環境の中で育った男女の双子(2歳児)の音声进行分析した。その結果、次のような音の変化が観察された：破裂音への置換、脱落、拗音化、ヤ行音への置換、側面接近音、側面化構音など。このように、ラ行音が様々な音として実現されていること背景には、大人の音声がもともと有している異音の多さが1つの要因になっていることが考えられる。そしてそれに加えて、ラ行音には素早い舌の動きが必要であることから、その難しさがこのような多様性のもう1つの要因になっているようである。

ある音素がある一定の範囲をもって実現される場合、そこから逸脱していなければ必ずしも構音障害とはならないわけであるが、ラ行音は通常の音素よりもその範囲が広いのも事実のようである。音素によって正常の範囲が異なる上、その範囲も月齢とともに変化するため、その範囲をきちんと把握しておくことも大事であると考えられる。そして、正常構音の範囲内であれば、より構音し易い異音を用いることも、言語治療をする上で意味のあることかも知れない。

後 援

全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会

全国難聴児を持つ親の会

全国ことばを育む親の会

全国失語症友の会連合会

第39回 日本コミュニケーション障害学会学術講演会 予稿集

2013年6月20日発行

発行者：第39回日本コミュニケーション障害学会学術講演会会長
進藤 美津子

事務局：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学言語聴覚研究センター
TEL：03-3238-3557 FAX：03-3238-3557
E-mail：jacd39gakkai@gmail.com

出版：  学術集会専門出版社
株式会社セカンド

〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025